

花々の開花が待ち遠しい、穏やかな春の息吹が感じられる今日の佳き日、同窓会長 和合直子様始め、PTA 役員の皆様、そして保護者の皆様のご臨席を賜り、令和6年度の卒業証書授与式を挙行できますことを、職員一同、大変喜ばしく思います。

ただいま卒業証書を授与いたしました272名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

世界が、人の声や歌うことを閉じ込めてしまったコロナ禍の中、皆さんなりに描いた「高校生」という3年間は、それまでの慣例や「当たり前」の概念を変化させ、コロナ後の急速に変化する昨今では、新しい扉を開き続けることの重要性を理解しながらも、本当にそれが正解なのかを悩みながら過ごす日々ではなかったかと推察いたします。そんな中でも精いっぱい駆け抜け果敢に挑戦を続ける姿を皆さんが見せてくれたこと、今さまざまに振り返っても感慨深い気持ちでいっぱいです。保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。高校卒業という大きな節目を迎えた今日まで、たくさんの愛情を持ってご支援くださいましたこと、また学校活動にご理解を賜りましたこと、心より感謝いたし、お祝い申し上げます。

少し前にベストセラーになった「モチベーション革命」という著書には、テクノロジーの進化がもたらす未来の形と、それに伴う人間の生き方 という帯で、皆さんの世代がこれから生きていくうえでの「モチベーションをいかに引き出すか」を述べています。「進化論」で有名なダーウィンは「種の起源」の中で、「生き残る種とは、最も強いものではない。もっとも知的なものでもない。それは、変化にもっともよく適応したものである」という有名な言葉を残しました。社会とテクノロジーが変化しても、「なぜか自分が頑張る意味がもてるもの」こういった、人間を動かす根源である「モチベーション」こそが、この世を動かし、各人が生きていく最大の武器になっていくと綴られています。かつて私たち大人の若かった時代は「ないものをいかに埋めるか」それが最大のモチベーションでした。しかし皆さんは生まれた頃から何もかもがそろっている時代であり、そもそも「なんのために頑張るのか」の価値観も私たちの世代とは大きく変わってきています。「これをやれば成功する」のマニュアルに従って生きてきたかつての時代ではなく、「これをやる意味」を見出しながら、自分の「好き」をとことん追究する、この探究心こそがダーウィンの説く「変化に適応した生き残る種」なのかもしれません。探究するということ。それはしかしながら、世の中に溢れる情報を見たり聞いたりしただけで分かったつもりになってしまうことでもなく、幾多の先人が心血注いだ圧倒的な量の知識を知ることだけでもなく、たくさんの書物に書かれた事実の先には、未知なることが無数にあることも理解しなければなりません。かつて宮中歌会始で入選した15歳の中学生の作品です。「この本に すべてががつまってるわけじゃない。だから私が続きを生きる」この若者の心意気こそが、未知の領域に挑戦し、まさに「生きる」姿であると今でも思うところであります。

皆さんは蟻ヶ崎高校という同じ学び舎で3年間を過ごし、今日、「卒業」という共通の節目を迎えましたが、1人1人のここまでの取り組みや本日を迎えるまでの過ごし方は多様でした。「スタートする位置がまちまちなところがいいところ」という、スタート時刻にラインを通過すれば良いというルール「ボートレース」のように、そのラインから遠く離れた場所から加速する選手もいれば、ラインぎりぎりに位置取りする選手もいる。「選手が自分なりにスタートラインの通過の状態を決める」このように、今、これからどんな人生を歩むか、「自分」を決める「卒業」というラインを通過し、大きく羽ばたこうとしている皆さんを、とても眩しく誇らしく感じるころ

です。皆さんには蟻ヶ崎高校で学んだ経験を胸に、今まで以上に自身をしっかり見つめ、歩む道を見極め力強く進んで欲しいと期待します。そして、どんなにテクノロジーが進化しようとも、皆さんの心通った温かな手で、世界を変える扉を開け続けていってくれることを願っています。

さらに大きな夢に向けての旅が始まる皆さんの船出にエールを送り、輝かしい未来が訪れることを祈念し、式辞といたします。

令和7年3月1日

松本蟻ヶ崎高等学校長 鳥谷越 浩子